

提 言

安全と安心

村上睦美 (前日本小児保健協会会長)

いつの時代でも、子どもがというより、すべての人たちが生活し、生きていくことは安全なことではありません。しかし、私たちは安全な環境で安心して生活することを望んでいます。

安全は代価を要します。そして安全度を高めるためには等比級数的に経費がかかります。例えば、通学路を考えた場合、車の通れない道を作ると安全係数はかなり高くなります。しかし、それでも100%安全とは言い切れません。さらに安全を求めると、転んでも怪我をしない舗装が必要になり、誘拐を防ぐために監視人が必要になります。このような条件を満たす通学路を全国的に作るためには天文学的な費用がかかります。

安全を求めることは経費の増加を意味し、これらは社会問題です。

一方、安心は個人的なものであり、また数量化することができません。安心の尺度はみんなそれぞれ違いますし、安心には、安心できるか、安心できないかの二者択一的な面があり、感覚的なものです。

医療においても、現在の医療水準や各個人の多様性を考えると、本質的に不確実なものです。このためすべての患者さんに完璧な安全を保証することはできません。そして医療従事者が安心を与えようとすればするほど医療訴訟の危険が増していくのです。このように安全と安心を同じレベルの問題として捉えることはできないのです。

私たちは子どもたちを安全な環境で、安心して育てていきたいと願っています。しかし、絶対的な安全はないのです。

社会が絶対的な安全を保証できないのですから、私たちは相対的な安全で、安心して生活ができる生き方をしないと不安に押しつぶされてしまいます。危険を予知し、それらを避けることができる生き方を学ぶ必要があります。そして子どもたちには危険についての学習が欠かせません。扇風機に指を突っ込むと痛い、車の近くによると轢かれる、パソコンやメールで知り合った人の中には危険な人がいるなど、実際に危険な目にあう前に学ばねばならないのです。

今後、子どもたちを囲む環境には危険がさらに増えていくと思われます。子どもたちを危険から遠ざけるだけでなく、危険を教え、それらを回避できる能力を取得させることが大切であると思います。



安全と安心 写真提供 村上睦美